ヤの女リヅパ麻布を取りて刈穫の初時より其屍上に天より雨ふるまでこれをおのれのために磐の上に布きおきて晝い空の鳥を屍の上に止らゑめず夜い野の獸をちかよらゑめざりき　十一　爰ゐアヤの女サウルの妾リヅパの爲しことダビデに聞えけるば　十二　ダビデ往てサウルの骨と其子ヨナタンの骨をヤベシギレアデの人々の所より取り是いペリシテ人がサウルをギルボアに殺してベテシヤンの衢ゐ懸たるをかれらが竊みさりたるものなり　十三　ダビデ其處よりサウルの骨と其子ヨナタンの骨を携へ上れりまた人々其懸られたる者等の骨を斂たり　十四　かくてサウルと其子ヨナタンの骨をベニヤミンの地のゼラにて其父キシの墓ゐ葬り都て王の命じたる所を爲り此より後神其地のために祈禱を聽たまへり　十五　ペリシテ人復イスラエルと戰爭を爲すダビデ其臣僕とゝもゐ下りてペリシテ人と戰ひけるゞダビデ困憊居りければ　十六　イシビベノブダビデを殺さんと思へり（イシビベノブい巨人の子等の一人ゐて其槍の銅の重い三百シケルゐり彼新しき劍を帶たり）　十七　ゑかれどもゼルヤの子アビシヤイダビデを助けて其ペリシテ人を擊ち殺せり是においてダビデの從者かれゐ誓ひていひけるい汝い再我僧と共に戰爭に出べからず恐らくい爾イスラエルの燈光を消さんと　十八　此後再びゴブにおいてペリシテ人と戰あり時ゐホシヤ人シベカイ巨人の子等の一人なるサフを殺せり　十九　爰に復ゴブにてペリシテ人と戰あり其處にてベテレヘム人ヤレオレギムの子エルハナンガテのゴリアテの兄弟ラミを殺せり其槍の柄い織の梁の如なりき　二十　又ガテに戰ありしゞ其處に一人の身長き人あり手ゐい各六の指あり足ゐい各六の指ありて其數合せて二十四なり彼もまた巨人の生る者あり　二十一　彼イスラエルを挑みしのゞダビデの兄弟シメアの子ヨナタン彼を殺せり　二十二　是らの四人いガテゐて巨人の生るものなりしがダビデの手と其臣僕の手ゐ斃れたり

ヌ 母下廿一〇八、三〇七
ル 申廿一〇廿三
チ 母上卅一〇十一、十二〇十三
ワ 母上卅一〇十
カ 書十八〇二八
ヨ 書七〇二六 母下二四〇二五
ダ 母下十八〇三
レ 王上十一〇三六、十五〇四 雙百卅二〇十七
ソ 代上廿〇四
ツ 代上十一〇二九
子 代上廿〇五
ナ 代上廿〇六
ラ 母上十七〇十、二五〇二六
ム 母上十六〇九
ウ 代上廿〇八

第二十二章

一　ダビデエホバゞ己を諸の敵の手とサウルの手より救ひいだしたまへる日ゐ此歌の言をエホバに陳たり曰く　二　エホバいわゞ巖わゞ要害我を救ふ者　三　わゞ磐の神なりわれ彼ゐ依賴むエホバいわゞ干わが救の角わが高櫓わが逃躲處わゞ救主なり爾我をすくひて暴き事を免れゑめたまふ　四　我はめまつるべきエホバに呼はりてわゞ敵より救はる　五　死の波濤われを繞き邪曲なる者の河われをおろれゑむ　六　冥府の繩われをとりまき死の機檻われゐのゞめり　七　われ艱難のうちゐエホバをよびまたわゞ神ゐ顧れりエホバ其殿よりわゞ聲をきゝたまひわが喊呼其耳ゐいりぬ　八　爰ゐ地震ひ撼き天の基動き震へりろい彼怒りたまへゞなり　九　烟其鼻より出てのぼり火ろの口より出て燒きつくしおこれる炭かれより燃いづ　十　彼天を傾けて下りたまふ黑雲ろの足の下にあり　十一　ケルブゐ乘て飛び風の翼の上ゐあらされ　十二　其周圍ゐ黑暗をおき集まれる水密雲を幕と爲たまふ　十三　ろのまへの光より炭火燃いづ　十四　エホバ天より雷をくだし最高者聲をいだし　十五　又箭をゑあちて彼等をちらし電をはゐちて彼等をうちやぶりたまへり　十六　エホバの叱咤とろの鼻の氣吹の風ゐよりて海の底あらはれいで地の基ゐあらはゐ　十七　エホバ上より手をたれて我をとり洪水の中より我を引ゐげ　十八　またわが勁き敵ゐよび我をゐくむ者より我をすくひたまへり彼等い我よりも強かりければゞなり　十九　彼等いわゞ菑災の日にわれに臨めりさきどエホバわゞ支柱とゐり　二十　我を廣き處ゐひきいだしわれを喜ぶゞゆゑゐ我をすくひたまへり　二一　エホバわゞ義ゐゑたゞひて我に報い吾手の清潔にゑたゞひて我に酬したまへり　二二　其いわれエホバの道をまもり惡をおこしてわゞ神に離しことおけれゞゐり　二三　ろの律例い皆わゞまへゐあり其法憲い我こゝを離れざるゐり　二四　われ神にむかひて完全かり又身を守りて惡を避たり　二五　故にエホバわゞ義ゐゑたゞひ其目のまへにわゞ潔白ゐるに循てわれに報いたまへり　二六　ゆゞみあるものゐ矜恤者ゐ

イ 詩十八〇三四〇十九
ロ 出十五〇一 士五〇一 申廿二〇三、七 王上八〇三、九 廿一〇三、七 王下二〇四 詩十八〇二、三 來二〇十三
ハ 申廿二〇四 詩十八〇二、三 來二〇十三
ニ 創十五〇一
ホ 路一〇六九
ヘ 箴十八〇十
ト 詩九〇九、十四〇六、五九 〇十六、七、一〇一 耶十六 〇十九
チ 詩九〇九、十四〇六、五九
リ 詩百十六〇三 詩百十六〇四、百廿〇一
ヌ 箴二〇二
ル 出三〇七 詩三四〇六、十五、十七 詩七七〇十八、九七〇四
ワ 士五〇四
カ 詩九七〇三 哈三〇五 來十二〇二九
ヨ 詩百四〇五 箴六四〇一
タ 出廿〇廿一 王上八〇十二
レ 詩百四〇三 詩九七〇二
ソ 申下廿二〇十 詩九七〇二
ツ 申下廿二〇九 士五〇廿 母上二〇十七
子 詩二九〇三 箴廿〇廿
ナ 申廿二〇廿三 詩七〇十 三七七〇十七、百四四〇
ラ 詩一〇四 太八〇二六
ム 詩百四〇一
ウ 詩百四〇七
ヰ 申廿一〇廿二〇一
ノ 詩廿一〇八百十八〇五
オ 母下十五〇二六 詩廿二〇八
ク 母下廿二〇二五 母上二六 〇廿三 王上八〇廿二 詩七〇八
ヤ 詩二四〇四
マ 創十八〇十九 詩百十九〇二 三百十八〇一 箴八〇廿
ケ 申七〇十二 詩百十九〇
フ 創六〇九、十七〇一 伯一 母下廿二〇廿一
コ 大五〇七
エ 大五〇七

ん爾矜恤ある者のごとくし完全人ゐん爾完全者のごとくし潔白者ゐん爾潔白もの〻ごとくし邪曲者ゐん爾嚴刻者のごとくゑたまふ難る民ん爾こゑを救たまふ然ど矜高者ん爾の目見て之を卑したまふ

ホバ爾んわが燈火なりエホバわが暗をてらしたまふ　われ爾ゐよりて軍隊の中を驅とほりわが神ゐ由て石垣を飛こゆ　神んりの道まつたしエホバの言ん純粹し彼ん都て已ゐ倚賴む者の干となりたまふ　夫エホバのほか誰か神たらん我儕の神のほか孰か磐たらん　神んわゐ强き堅寨ゐてわゐ道を全うし　わゐ足を鹿の如くなし我をわゐ崇邱ゐ立ゑめたまふ　神わが手に戰を敎へたまへゐわゐ腕ん銅の弓をも挽を得　爾我に爾の救の干を與へ爾の慈悲われを大ならゑめたまふ　爾わが身の下の步を恢廓ゑめたまへゞ我踝ふるへず　われわゐ敵を追て之をほろぼし之を絶すまでんかへらず　われ彼等を絶し彼等を破碎ゞ彼等たちえずわゐ足の下ゐたふる　汝戰のためゐ力をもて我に帶しめ又われゐ逆ふ者をわが下ゐ拜跪しめたまふ　爾わゐ敵を去て我ゐ後を見せゑめたまふ我を惡む者んわれ之をほろぼさん　彼等環視せど救ふ者なしエホバを仰視ど彼等ゐ應たまはず　地の塵の如くわれ彼等をうちくだき又衢間の泥のおとくわれ彼等をふミにぢる　爾われをわが民の爭鬪より救ひ又われをまもりて異邦人等の首長となしたまふわれ彼等をしたがはしむ　異國人等ん我ゐ媚び耳ゐ聞て均しく我に去たゞふ　異邦人等ん衰へ其衞所よわが知ざる民我につかふり戰慄て出づ　エホバん活る者なりわが磐ん讚べきかなわが救の磐の神んわがめまつるべし　此神われに仇を報いしめ國々の民をわが下ゐくだらしめたまひ　又わが敵の中よりわれを出し我にさからふ者の上に我をわげまた强暴人の許よりわれを救ひいだしたまふ　是故にエホバよわれ異邦人等のうちに爾を讚ほめ爾の名を稱へん　エホバろの王を救ゐはいゐしろの受膏者なるダビデと其裔ゐ久永に恩を施したまふゐり

第二十三章

一　ダビデの最後の言ん是なりエサイの子ダビデの詔言即ち高く擧られし人ヤコブの神に膏をろ〻ごれし者イスラエルの善き歌人の詔言　二　エホバの靈わが中ゐありて言たまふ其諭言わが舌ゐあり　三　イスラエルの神いひたまふイスラエルの磐われゐ語たまふ人を正く治むる者神を畏れて治むる者ん　四　日の出の朝の光のごとく雲なき朝のごとく又雨の後の日の光明ゐよりて地に茁いづる新草のごとし　五　わゐ家かく神と〻もゐゐるゐゐらずや神萬具備りて鞏固なる永久の契約を我ゐなゑたまへり吾が救と喜を皆いかで生ぜゑめたまはざらんや　六　ゑかれども邪なる者ゑ荊棘のおとくゐゑて手をもて取がたけれゞ皆ともゐすてられん　七　之ゐふる〻人は鐵と槍の柯とを其身ゐ備ふべし是ん火にやけて燒たゆるにいたらん　八　是等んダビデの勇士の名なりタクモニ人ヤショベアムん三人衆の長なりしゐ一時八百人ゐむかひて槍を揮ひて之を殺せり　九　彼の次んアボア人ドヽの子エルアザルゐして三勇士の中の者ゐり彼其處ゐ戰はんとて集まれるペリシテ人ゐむかひて戰を挑みイスラエルの人々の進みのぼれる時にダビデと〻もゐ居たりしが　十　たちてペリシテ人を擊ち終に其手疲て其手劍ゐ固着て離れざるにいたれり此日エホバ大ゐる救拯を行ひたまふ民ん彼の跡ゐゑたがひゆきて只褫取而已なりき　十一　彼の次んハラリ人アゲの子シャンマなり一時ペリシテ人一隊となりて集まれり彼處ゐ扁豆の滿たる地の處ゐり民ペリシテ人のまへより逃たるに　十二　彼其地の中ゐ立て禦ぎペリシテ人を殺せりゑかして　十三　エホバ大ゐる救拯を行ひたまふ　刈穫の時に三十人衆の首長なる三人下りてアドラムの洞穴に往てダビデに詣れり時ゐペリシテ人の隊レパイムの谷ゐ陣ゐれり　十四　其時ダビデん要害に居りペリシテ人の先陣んベテレヘムゐあり　十五　ダビデ羨ひていひけるん

レ 利十七〇十
ソ 代上十一〇廿
ツ 雷十五〇廿一
子 出十五〇十五 代上十一〇廿二
ナ 代上十一〇廿三
ラ 母上廿二〇十四
ム 母下八〇十八、廿〇廿三
ウ 母下二〇十八
ヰ 代上十一〇二七
ノ 士三〇九
オ 申一〇二四

誰かベテレヘムの門わある井の水を我にのまゝめんかと　十六 三勇士乃ちペリシテ人の陣を衝き過てベテレヘムの門にある井の水を汲取てダビデの許わ携へ來れり然どダビデ之をのむことをせずこれをヱホバのまへに灌ぎて　十七 いひけるハヱホバよ我決てこれを爲じ是ハ生命をかけて往し人の血ゐりと彼これを飲ことを好まざりき三勇士は是等の事を爲り　十八 ゼルヤの子ヨアブの兄弟アビシヤイハ三十人衆の首たり彼三百人わむこのひて槍を揮ひて殺せり彼其三十人衆の中に名を得たり　十九 彼ハ三十人衆の中の最も尊き者にして彼等の長とゐれり然ども三人衆にハ及ゞざりき　二十 ヱホヤダの子カブジエルのベナヤは勇氣あり多くの功績ありし者なり彼モアブの人の獅子の如きもの二人を擊殺せり彼ハ亦雪の時わ下りて穴の中わて獅子を擊殺せり　二一 彼また容貌魁偉たるエジプト人を擊殺せり其エジプト人ハ手に槍を持たるに彼ハ杖を執て下りエジプト人の手より槍を捩とりて其槍をもてこれを殺せり　二二 ヱホヤダの子ベナヤ是等の事を爲し三十勇士の中に名を得たり　二三 彼ハ三十人衆の中に尊かりしかども三人衆わは及ゞざりきダビデかれを參議の中に列しむ　二四 三十人衆の中わハヨアブの兄弟アサヘルベテレヘムのドヾの子エルハナン　二五 ハロデ人シヤンマハロデ人エリカ　二六 パルデ人ヘレヅラコア人イツケシの子イラ　二七 テヂトラ人アビエゼルホシヤ人メブンナイ　二八 アホア人ザルモン子トパ人マハライ　二九 子トパ人バアナの子ヘレブベニヤミンの子孫のギベアより出たるリバイの子イツタイ　三〇 ヒラトン人ベナヤガアシの谷のヒダイ　三一 アルバテ人アビアルボンバホリム人アズマウテ　三二 シヤルボニ人エリヤバキゾニ人ヤセン　三三 ハラリ人シヤンマの子ヨナタンアラリ人シヤラルの子アヒアム　三四 ウルの子エリパレテマアカ人ヘペルギロ人アヒトペルの子エリアム　三五 カルメル人ヘツライアルバ人パアライ　三六 ゾバのナタンの子イガルガド人バニ　三七 アンモニ人ゼレクゼルヤの子ヨアブ

ク 母上廿〇二六
ヤ 母下廿〇二六
イ 母下廿一〇一
ロ 代上廿一〇一　雅一〇十三、十四
ハ 代上二七〇廿三、二四
ニ 士廿〇一
ホ 耶十七〇五
ヘ 申二〇三六　雷十三〇九、十六
ト 民卅二〇一三
チ 雷十九〇四七　士十八〇二
リ 雷十九〇二八　士十八〇二八
ヌ 代上廿一〇五
ル 母上二四〇五
ヲ 母下十二〇十三
ワ 母上十三〇十三
カ 母上九〇九　代上二九〇二
ヨ 母上廿二〇五
タ 代上廿一〇十八

の武器を執る者ベエロデ人ナハライ　三八 エテリ人イラエテリ人ガレブ　三九 ヘテ人ウリヤあり都三十七人

第二十四章

一 ヱホバ復イスラエルわむかひて怒を發しダビデを感動して彼等に敵對ゑめ往てイスラエルとユダを數へよと言ゑめたまふ　二 王乃ちヨアブおよびヨアブとゝもにある軍長等にいひけるハ請ふイスラエルの諸の支派の中をダンよりベエルシバに至るまで行めぐりて民を核べ我をして民の數を知しめよ　三 ヨアブ王わいひけるハ幾何あるともねゞはくハ汝の神ヱホバ民を百倍に增たまへ而して王わが主の目ろれを視るにいたれ然りといへども王わゞの主の此事を悅びたまふハ何故ゾやと　四 されど王の言ヨアブと軍長等に勝ければヨアブと軍長等王の前を退さてイスラエルの民を核べに往り　五 かれらヨルダンを濟りアロエルより即ち河の中の邑より始めてガドわいたりヤゼルにいたり　六 ギレアデにいたりタテムホデシの地わいたり又ダニヤンにいたりてシドンに旋り　七 またツロの城にいたりヒビ人とカナン人の諸の邑にいたりユダの南わ出てベエルシバにいたれり　八 彼等國を徧く行めぐり九月と廿日を經てエルサレムに至りぬ　九 ヨアブ人口の數を王に告たり即ちイスラエルわ劍を拔く壯士八十萬ありきユダの人ハ五十萬ありき　十 ダビデ民の數を書し後其心自ら責む是においてダビデヱホバにいふ我これを爲して大に罪を犯したりねゞはくハヱホバよ僕の罪を除きたまへ我甚だ愚なる事を爲りと　十一 ダビデ朝興し時ヱホバの言ゞビデの先見者なる預言者ガデに臨みて曰く　十二 往てダビデに言へヱホバ斯いふ我汝に三を示す汝其一を擇べ我其を汝に爲んと　十三 ガデダビデの許にいたりこれに告てこれにいひけるハ汝の地に七年の饑饉いたらんか或ハ汝敵に追れて三月其前に遁んか或ハ爾の地に三日の疫病わらんか爾考へてわが如何なる答を我に遣せし者に爲べきかを決めよ　十四 ダビデガデにいひけるハ我大に苦しむ請ふ我儕をしてヱホバ

レ 詩百三〇八、十三、十四、百十九、百五六
ソ 雙四七〇六 亞一〇十五
ツ 代上廿一〇十四、二七〇二
子 出十二〇廿三 代上廿一〇十五
ナ 創六〇六 母上十五〇十一 耳二〇十三、十四
ラ 代上廿一〇十五 母下二四〇十八 代下三〇一
ム 代上廿一〇十七
ウ 代上廿一〇十八
井 創廿三〇八 五十六
ノ 民十六〇四八、五十
オ 王上十九〇廿一
ク 出廿〇四十、四一
ヤ 代上廿一〇二四、二五
マ 母下廿一〇十四
ケ 母下廿四〇廿一

の手に陷らしめよ其憐憫大なれば我をして人の手に陷らしむるなかれ　十五 是において エホバ朝より集
會の時まで疫病をイスラエルに降したまふ ダンよりベエルシバまでに民の死る者七萬人なり　十六 天の使其
手をエルサレムに伸てみれを滅さんとなたりしかエホバ此害惡を悔て民を滅す天使にいひたまひけるい
足り今汝の手を住めよと時にエホバの使い エブス人アラウナの禾場の傍にあり　十七 ダビデ民を擊つ天使を
見し時エホバに申していひけるい嗚呼我い罪を犯したり我い惡き事を爲たり然ども是等の羊群い何を爲
たるや請ふ爾の手を我とわゞの父の家に對たまへと　十八 此日がデダビデの所にいたりてかれにいひけるい上
りてエブス人アラウナの禾場にてエホバに壇を建よ　十九 ダビデガデの言に隨ひエホバの命じたまひしごと
くのぼれり　二十 アラウナ觀望て王と其臣僕の已の方に進み來るを見アラウナ出て王のまへに地に伏て拜せ
り　二一 かくてアラウナいひけるい何に因ての王わゞの主僕の所にきませるやダビデいひけるい汝より禾場を
買ひとりエホバ壇を築きて民ゟ降る災をとゞめんとてなり　二二 アラウナダビデゟいひけるいねゞむくい
王わゞ主其目に善と見ゆるものを取て献たまへ燔祭にい牛あり薪ゟい打禾車と牛の器ありと　二三 アラウナ
これを悉く王に奉呈ぐアラウナ又王にねゞはくい爾の神エホバ爾を受納たまむことをといふ　二四 王アラ
ウナにいひけるい勢すべからず我必ず値をはらひて爾より買とらん我費なしに燔祭をわが神エホバに獻
ぐることをせじとダビデ銀五十シケルにて禾場と牛を買とれり　二五 ダビデ其處にてエホバに壇を築き燔祭
と酬恩祭を獻げたり是において エホバ其地のために祈禱を聽たまひて災のイスラエルに降ることを止りぬ

撒母耳後書　終

イ 詩十九〇十八
ロ 母下三〇四
ハ 母下十五〇一
ニ 母下三〇三、四　代上三〇二
ホ 母下廿〇三五
ヘ 王上二〇廿二、二八
ト 王上四〇十八
チ 母下廿三〇八
リ 母下十七〇十七
ヌ 母下三〇四
ル 代上廿二〇九

列王紀畧上

第一章

一 爰にダビデ王年邁みて老い寢衣を衣するも温ちざりければ　二 其臣僕等彼にいひけるい王わゞ
主のために一人の若き處女を求めゟめて之をして王のまへにたちて王の左右となり汝の懷に臥て王わが
主を暖めゟめんと　三 彼等乃ちイスラエルの四方の境に美き童女を求めてシユナミ人アビシヤグを得て之
を王に攜きたれり　四 此童女甚だ美くして王の左右となり王に事たり然ど王之と交ゟらざりき　五 時にハギ
テの子アドニヤ自ら高くし我い王とならんと言て已のために戰車と騎兵および自已のまへに驅る者五十
人を備へたり　六 其父い彼ゞ生れてより已來汝何故に然するやと言てかれを痛ゟめし事ゟかりきアドニヤ
も亦容貌の甚だ美き者ゟてアブサロムの次に生れたり　七 彼ゼルヤの子ヨアブおよび祭司アビヤタルと商
議ひしかば彼等之に從ひゆきて助けたり　八 されど祭司ザドクとエホヤダの子ベナヤと預言者ナタンおよ
びシメイとレイならびにダビデに屬したる勇士いアドニヤに與せざりき　九 アドニヤエンロゲルの近邊ゟ
るゾヘレテの石の傍にて羊と牛と肥畜を宰りて王の子ゟる已の兄弟ゟおよび王の臣僕なるユダの人を盡く
請けり　十 されども預言者ナタンとベナヤと勇士とおのれの兄弟ソロモンとをゞ招かざりき　十一 爰にナタン
ソロモンの母バテシバに語りていひけるい汝ハギテの子アドニヤが王とゟれるを聞ざるかゟかるにわれ
らの主ダビデいこれを知ざるなり　十二 されど請ふ來れ我汝に計を授て汝をして已の生命と汝の子ソロモ
ンの生命を救ゟめん　十三 汝往てダビデ王の所に入り之にいへ王わが主よ汝い嫡に誓ひて汝の子ソロモンい
我に繼で王となりわが位に坐せんといひたまひしゟわらずや然にアドニヤ何故に王となれるやと　十四 われ
また汝ゞ尙其處にて王と語ふ時に汝ゟ次て入り汝の言を證すべしと　十五 是ゟおいてバテシバ寢室に入りて

王の所ゐたるゐ王い甚だ老てシュナミ人アビシヤグ王に事へ居たり　十六　バテシバ躬を鞠め王を拜す王い
ふ何なるや　十七　かれ王にいひけるいわが主汝い汝の神ヱホバを指て嫡に汝の子ソロモンい我ゐ繼で王とゐ
りわが位に坐せんと誓ひたまへり　十八　玄かるに視よ今アドニヤ王とゐれり而て王わゐの主汝い知たまへず　十九
彼い牛と肥畜と羊を饒く宰りて王の諸子および祭司アビヤタルと軍の長ヨアブを招けりされど汝の僕ソ
ロモンをゞ招かざりき　二十　汝王わが主よイスラエルの目皆汝に注ぎ汝が彼等に誰が汝ゐ繼で王わゐの主の位
に坐すべきを告るを望む　二一　王わが主の其父祖と共に寢たまへん時ゐ我とわが子ソロモンい罪人と見做さ
るゝゐいたらんと　二二　バテシバ尚王と語ふうちに視よ預言者ナタンも亦入きたりけれゞ　二三　人々王に告て預
言者ナタン此にありと曰ふ彼王のまへに入り地に伏て王を拜せり　二四　玄ゐしてナタンいひけるい王わが主
汝いアドニヤ我に繼で王とゐりわゐ位に坐すべしといひたまひしや　二五　彼い今日下りて牛と肥畜と羊を饒
く宰へて王の諸子と軍の長等と祭司アビヤタルを招けり玄かして彼等もアドニヤのまへに飲食してアド
ニヤ王壽かれと言ふ　二六　されど汝の僕ゐる我と祭司ザドクとヱホヤダの子ベナヤと汝の僕ソロモンとい
彼請かざるなり　二七　此事い王わゐ主の爲たまふ所ゐるか玄かるに汝誰が汝に繼で王わが主の位に坐すべき
を僕に知せたまはざるなりと　二八　ダビデ王答ていふバテシバをわが許に召せと彼乃ち王のまへに入て王の
まへにたつに　二九　王誓ひていひけるいわが生命を諸の艱難の中に救ひたまひしヱホバい活く　三十　我イスラエ
ルの神ヱホバを指て誓ひて汝の子ソロモン我に繼で王とゐり我に代りてわが位に坐すべしといひしごと
くに我今日爲すべしと　三一　是ゐゐいてバテシバ躬を鞠め地に伏て王を拜し願くいわが主ダビデ王長久に生
ながらへたまへといふ　ダビデ王いひけるいわが許に祭司ザドクと預言者ナタンおよびヱホヤダの子べ

ヲ 王上一〇十三冊
ワ 王上一〇七、八、六、二五
カ 申冊一〇十六　王上二〇十
ヨ 王上一〇十九
タ 母上十〇二四
レ 母下四〇九
ソ 王上一〇十七
ツ 尼二〇三　但二〇四

ナヤを召と彼等乃ち王のまへに來る　三三　王彼等ゐいひけるい汝等の主の臣僕を伴ひわが子ソロモンをわが
身の騾ゐ乘せ彼をギホンゐ導き下り　三四　彼處ゐて祭司ザドクと預言者ナタンい彼ゐ膏をろゝぎてイスラエ
ルの上ゐ王と爲すべし玄かして汝ら喇叭を吹てソロモン王壽かれと言へ　三五　かくして汝ら彼ゐ隨ひて上
り來るべし彼い來りてわが位ゐ坐し我に代りて王となるべし我彼を立てイスラエルとユダの上に主君と
なせりと　三六　ヱホヤダの子ベナヤ王ゐ對へていひけるいアメンねがはくい王わが主の神ヱホバ然言たまへ
んことを　三七　ねがはくいヱホバ王わが主とゝもに在せしごとくソロモンとともに在してその位をわが主ダ
ビデ王の位よりも大いなら玄めたまへんことを　三八　斯て祭司ザドクと預言者ナタンおよびヱホヤダの子ベ
ナヤ並にケレテ人とペレテ人下りソロモンをダビデ王の騾ゐ乘せて之をギホンゐ導きいたれり　三九　玄かし
て祭司ザドク幕屋の中より膏の角を取てソロモンに膏ろゝげりかくて喇叭を吹きならし民みなソロモ
ン王壽かれといへり民みなかれに隨ひ上りて笛を吹き大いに喜祝ひ地いかれらの聲にて裂たり　四一　アド
ニヤおよび彼とともゐ居たる賓客其食を終たる時ゐ皆これを聞りヨアブ喇叭の聲を聞ていひけるい城邑
の中の聲音何ゞ諠囂やと　四二　彼が言をる間に視よ祭司アビヤタルの子ヨナタン來るアドニヤ彼ゐいひけ
るい入よ汝い勇ある人なり嘉音を持きたれるならん　四三　ヨナタン答へてアドニヤゐいひけるい誠ゐわが主ダ
ビデ王ソロモンを王となしたまへり　四四　王祭司ザドクと預言者ナタンおよびヱホヤダの子ベナヤ並ゐケレ
テ人とペレテ人をソロモンとともゐ遣したまふ卽ち彼等いソロモンを王の騾に乘せてゆき　四五　祭司ザドク
と預言者ナタンギホンゐて彼に膏をろゝぎて王となせり而して彼等其處より歡て上るゞ故に城邑い喧囂
し汝らが聞る聲音い是なり　四六　又ソロモン國の位ゐ坐し　四七　且王の臣僕來りてわれらの主ダビデ王ゐ祝を陳

子 母下廿〇六
ナ 帖六〇八
ラ 代下冊二〇冊
ム 母上十〇一、十六〇三、十二 母上十二〇四、五〇三、王上十九〇十六、三十一〇十二 王下九〇三十一〇十四 王下九〇十三、十一〇十四
ウ 母上十五〇十
非 書一〇五、十七 母上廿〇十三
ノ 王上一〇四七
オ 母下八〇十八、廿三〇廿三
ク 出冊〇廿三、廿五、冊二 詩八九〇廿
ヤ 代上二九〇廿二
マ 母上十〇二四
ケ 母下十八〇二七
フ 代上二九〇廿三

て願くは汝の神ソロモンの名を汝の名よりも美し其位を汝の位よりも大ならしめたまへと言りをかして王に牀に上ぼて拜せり 四八 王また斯いへりイスラエルの神エホバはむべきかなエホバ今日わが位に坐する者を與たまひてわが目亦これを見るなりと 四九 アドニヤとともわある賓客皆驚愕き起て各其途ゐ去りゆけり 五十 茲にアドニヤソロモンの面を恐れ起て往き壇の角を執へたり 五一 或人ソロモンゐ告ていふアドニヤソロモン王を畏る彼壇の角を執て願くはソロモン王今日我に劍をもて僕を殺じと誓ひたまへと言たりと 五二 ソロモンいひけるは彼もし善人となるならば其髪の毛一すぢも地におちざるべし然ど彼の中に惡の見るあらば死をむべしと 五三 ソロモン王乃ち人を遣て彼を壇より携下らしむ彼來りてソロモン王を拜しければ ソロモン彼ゐ汝の家ゐ往といへり

第二章

一 ダビデ死ぬる日近よりければ其子ソロモンに命じていふ 二 我は世人の皆往く途に往んとす汝は強く丈夫のおとく爲れ 三 汝の神エホバの職守を守り其道に歩行ゑ其法憲と其誡命と其律例と其証言とをモーセの律法に錄されたるごとく守るべし然らば汝凡て汝の爲ところと凡て汝の向ふところゐて榮ゆべし 四 又エホバは其嘗に我の事ゐ付て語りて若汝の子等其道を愼ゑ心を盡し精神を盡して眞實をもて吾前ゐ歩バイスラエルの位ゐ上る人汝に缺ることなかるべしと言たまひし言を堅したまはん 五 又汝はゼルヤの子ヨアブが我に爲たる事即ち彼がイスラエルの二人の軍の長ネルの子アブネルとエテルの子アマサに爲たる事を知る彼此二人を切殺し太平の時に戰の血を流し戰の血を己の腰の周圍の帶と其足の履に染たり 六 故に汝の惠智に依たゞひて事を爲し其白髪を安然に墓ゐ下らしむるなかれ 七 但しギレアデ人バルジライの子等には恩惠を施こし彼等をして汝の席にて食ふ者の中にあらしめよ彼等はわが汝の兄弟アブ

イ 創四七〇二九、申卅一〇十四　ロ 雷廿三〇十四　ハ 申十七〇十九、廿
ニ 申二九〇九、雷一〇七、代上廿二〇十二、十三
ホ 詩百卅二〇十二
ヘ 王下廿〇三　ト 母下七〇十二、十三　王上八〇二五
チ 母下七〇二五
リ 母下三〇三九、十八〇五、十三、十四、十九〇五、六、七
ヌ 母下三〇二七　ル 母下廿〇十
ヲ 申二九〇九、雷一〇七、代上廿二〇十二、十三
ワ 母下十九〇廿一、八二八
カ 母下九〇七、十、十九〇二
ヨ 母下十七〇二七

サロムの面を避て逃し時我ゐ就たるなり 八 視よ又バホリムのベニヤミン人ゲラの子シメイ汝とともゐ在り彼いわがマハナイムゐ往し時厲しき詛言をもて我を詛へり然ども彼ヨルダンゐ下りて我を迎へたれば我はエホバを指て誓ひて我劍をもて汝を殺さじといへり 九 然りといへども彼を辜おき者とする勿れ汝は智惠ある人なれば彼に爲べき事を知るゐり血を流して其白髪を墓に下すべしと 十 斯てダビデは其父祖と偕ゐ寢りてダビデの城に葬らる 十一 ダビデのイスラエルに王たりし日は四十年なりき即ちヘブロンにて王たりし事七年エルサレムにて王たりし事三十三年 十二 ソロモン其父ダビデの位に坐し其國は堅固く定まりぬ 十三 爰ゐハギテの子アドニヤソロモンの母バテシバの所に來りければバテシバいひけるは汝は平穏ゐる事のために來るや彼いふ平穏なる事のためなり 十四 彼又いふ我は汝に言さんとする事ありとバテシバいふ言されよ 十五 かれいひけるは汝の知おとく國は我の有にしてイスラエル皆其面を我に向て王となさんと爲りき然るに國は轉てわが兄弟の有となれり其彼の有となれるはエホバより出たるなり 十六 今我一の願を汝に求む請ふわが面を黜くるゐかれバテシバかれにいひけるは請ふソロモン王に言て彼をしてシユナミ人アビシヤグを我に與て妻となさしめよ彼に汝の面を黜けざるべければなりシバいふ善し我汝のために王に言んと 十九 かくてバテシバアドニヤのために言とてソロモン王は許に至りければ王起てかれを迎へ彼を拜して其位に坐なほり王母のために座を設けゐむ乃ち其右に坐せり 二十 ゐかしてバテシバいひけるは我一の細小き願を汝に求むわが面を黜くるゐかれ王かをにいひけるは母上よ求めたまへ我汝の面を黜けざるゐり 二一 彼いひけるは請ふシユナミ人アビシヤグをアドニヤに與て妻となさしめよ 二二 ソロモン王答て其母にいひけるは何ぞアドニヤのためにシユナミ人アビシヤグを求めらるゝや

タ 母下十六〇五
レ 母下十九〇十八
ソ 母下十九〇廿三　ツ 出廿〇七、伯九〇二八
子 創四二〇三八、四四〇卅一　ナ 王上一〇廿一、徒二〇二九、十二〇三六
ラ 母下五〇七　ム 母下五〇四　代上二九〇二
ウ 代上二九〇廿三　代下一〇一
井 母上十六〇四、五
ノ 王上一〇五
オ 代上廿二〇九、十、二八〇五、六、七　羅廿一〇卅　但二〇廿一
ク 詩百卅二〇十
ヤ 王上一〇三、四
マ 出廿〇十二　ケ 詩四五〇九